

Boydell's graphic illustrations of the dramatic works of Shakspeare, consisting of a series of prints forming an elegant and useful companion to the various editions of his works, engraved from pictures purposely painted by the very first artists and lately exhibited at the Shakspeare Gallery.

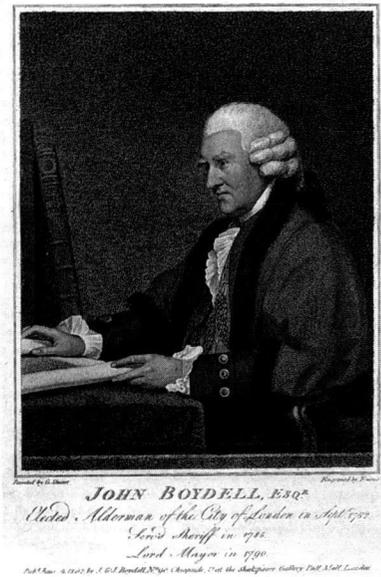
London, Boydell, [1813]. 1vol. 100 plates (copper hand-col.). 45×32cm. <K771.8-B> 文献番号 8-3

『ボイデルによるシェイクスピア戯曲版画集；シェイクスピア・ギャラリーに展示された、一流の画家達によって描かれた絵画からの』

本書はシェイクスピア劇の舞台場面をモチーフにして描かれた100枚から成る手彩色銅版画集で、「シェイクスピア・ギャラリー」のオーナーであったジョン・ボイデルによって企画・出版されている。ボイデルはこの版画集を製作するにあたり、当時イギリスで活躍していた一流画家に原画を描かせ、画廊に展示された絵から20人の作品100点を選び、下絵とした。

シェイクスピア劇を題材に描かれた絵画は、本書のように一つの企画のもとに制作された画集もあるが、むしろ画家個人がそれぞれの思いのもとに自由に描いた作品の方が一般的には知られている。とくにロマン主義時代のシェイクスピア崇拜の風潮と相まってターナー、ドラクロアをはじめ各国の画家たちが競いあうように描いている。なかでもシェイクスピアに深い関心を示したのは、ラファエル前派の画家たちで、ミレイの「オフィーリア」、ロセッティの「オフィーリアの発狂」をはじめ広く親しまれている作品が少なくない。また、両者を比較すると、本書『ボイデルによる版画集』より、後者の作品の方が質的に高いと評価する人も多い。しかし、一人の作家のためにこれだけの画家を総動員した企画というもおそらく美術史には例がなく、ボイデルが設立した「シェイクスピア・ギャラリー」のもつ歴史的意義は高いと思う。なお、私見を付け加えれば、「シェイクスピア・ギャラリー」の本来の意義は、当時のイギリス美術界の歴史的な背景のもとで創立されたことと、それに生涯をかけたジョン・ボイデルという人物にあると筆者は考える。

ジョン・ボイデル (John Boydell, 1719-1804) はイギリス西部にあるシュロップシャー州生まれ、父の職業である土地の測量技師を継ぐが、絵画への憧れを捨てきれず、ロンドンに出て、セン



ボイデルの肖像画

ト・マーチンの小さな美術学校で版画を学び、版画師トムス (W. H. Tomus) のところに徒弟として年季奉公に入る。数年後、独立して自らも版画師として風景画等の銅版画を製作するが、1767年頃までには版画制作から手を引き、生涯の仕事となる版画の売買や版画出版業に着手する。その後、政界に進出、1782年に市会議員 (アルダーマン) に選ばれ、1785年には州長官に就任した。長官在任中、イギリスの画家の作品を優れた版画家に彫版させて版画に複製し、パリやヴェニスに輸出して好評を得る。版画による海外貿易で得た利益で1789年にロンドンのクラブ街の一角ペル・メルに「シェイクスピア・ギャラリー」を設立して一躍名声をあげ、その余勢をかって、1790年、ついにはロンドン市長まで勤めた人物である。

ボイデルは画廊開設にあたって、当代一流の画家たちにシェイクスピア劇の舞台場面を描かせた。30人以上の画家から200点に近い作品が集まり、ギャラリーに展示された絵は大評判になった。彼は展示された絵から比較的小型の絵100点を選び、1802年に『国民版シェイクスピア戯曲全集』(全9巻)の挿絵にして出版し、翌1803年には、大型の絵100点を選んで『イギリスの画家によるシェイクスピア戯曲版画集』を刊行した。これが本書の初版である。

ボイデルが版画商として活躍した18世紀後半は、建築・彫刻・絵画・工芸等芸術のあらゆるジャンルで古典古代への回顧が著しく高まり、ギリシア、ローマの芸術の復活をめざした新古典主義様式の全盛時代であった。絵画の分野では、古代的なモチーフが多く用いられ、ギリシア・ローマの神々、キリスト、聖人、英雄などの物語を描く歴史画がその頂点とされた。ヨーロッパの美術はフランス、イタリアを中心に展開されていたが、イギリスといえば産業革命により科学技術は各国より先んじていたが、絵画の分野では一歩遅れをとっていた。イギリスの美術界は16世紀ではハンス・ホルバイン (Hans Holbein, 1497/98-1543)、17世紀ではヴァン・ダイク (A. van Dyck, 1599-1641) が肖像画家として活躍したが、彼等はドイツ、フランドルから招かれたお雇い宮廷画家で生粋のイギリス人ではなかった。イギリスはウィリアム・ホガース (W. Hogarth, 1697-1764) の登場により自国の誇る画家を得るが、ホガースは風刺画家・風俗画家であっても歴史画家ではなく、正統派からみればマイナーな画家であった。1768年にジョージ三世の後ろ楯を得てロイヤル・アカデミーが設立されたのも美術面での遅れに対する反省が理由の一つであった。

初代アカデミー院長は、本書の『真夏の夜の夢』の場面を描いているレイノルズ (J. Reynolds, 1723-1792) である。レイノルズは今日では肖像画家として知られているが、彼の本意は当時のヨーロッパ絵画の本流であり、〈高貴〉なジャンルとして奨励されていた歴史画をイギリスに興すことにあった。だが、歴史画は美術的には高い評価が得られても無名の画家にとってはあまり売れる絵ではなく、彼らは肖像画や風景画、貴族に好まれる馬や狩猟の絵を描いて生活の糧にしていた。ボイデルはこうした画家たちの絵の売買やオリジナルの絵から版画に複製する仲介役を受け持ち、自らも利ざやを得ていた。

画商として成功していたボイデルのもとに、レイノルズ、ベンジャミン・ウエスト、J.

ロムニー、P. サンドビーといったアカデミー会員たちが集まり、シェイクスピアの作品を絵画化することで、イギリスの歴史画にはずみをつけ、イギリスの美術をフランス、イタリアの水準まで引き上げようという熱い思いが秘められていたのである。

しかし、ボイデルが企画したシェイクスピア戯曲版画の海外輸出は、不幸にもフランス革命によって中断され、彼は経済的にゆきづまり、財産は没収、版画集は競売にかけられて、1804年にチープサイドの自宅で寂しくこの世を去った。

予定より遅れて1803年に出版された『ボイデルによる版画集』もあまり好評ではなかったらしい。一説には版画集は1805年に出され、彼はこの版画集の出版をみることなく亡くなった、ともいわれている。画廊は処分され、絵画も散逸し、今ではこの『ボイデルの版画集』のみが名画のおもかげをとどめている。

本書の原画を描いた20人の画家は、当時のイギリス美術界では一流であったが、今日、美術史に名を残している画家は、レイノルズ、フュースリ(H. Fuseli, 1741-1825)、ロムニー(G. Romney, 1734-1802)、ライト(Wright of Derby)など数人であり、掲載作品もフュースリを除けば、それぞれ1点ぐらいである。しかも絵画は版画に置き換えられており、本来のもつ雰囲気や微妙なタッチは原画には及ばないであろう。こうした点から絵画的には必ずしも高い評価を得られてないにしろ、この版画集がイギリス美術界に与えた影響は大きいと思う。それより何よりもジョン・ボイデルというイギリスをこよなく愛し、激しい時代の流れのなかで波瀾万丈に生きた一人の人物が現代の私たちの胸を打つ。

末尾になったが、本書の構成と内容をあげる。タイトルページ、ボイデルの肖像画の扉絵に続き、収録されている図版の目次一覧と100点の図版から成っている。目次には、劇の題名、幕と場、その場面の解説やセリフが記述されている。作品は「テンペスト」「ウインザーの陽気な女房たち」「尺には尺を」「間違いの喜劇」「から騒ぎ」「真夏の夜の夢」「お気に召すまま」「ジャジャ馬ならし」「ヘンリー五世」「ヘンリー六世」「リチャード三世」「ヘンリー八世」「ジュリアス・シーザー」「アントニオとクレオパトラ」「リア王」「ロミオとジュリエット」「ハムレット」「オセロ」等である。最も多い作品は「ロミオとジュリエット」の6枚と「ウインザーの陽気な女房たち」「から騒ぎ」の5枚である。

本書の売り立て目録の解説によると、1813年版は、1802年版の残本を元版にして制作されたもので、ジャガードの『シェイクスピア書誌』や『全米総合目録(NUC)』にも収録されていない、稀少な資料である。

装丁は19世紀風ハーフブラックのモロッコ革装、見返しはマーブル紙を用いたフォリオ判の豪華本である。(平井)



R. ウェスタル画
「オフィーリアの死」ハムレットより